

J. London, *The Scarlet Plague*

——人類終焉の物語——

辻井 榮 滋

I

人類が人類たる存在感を示すようになって、500万年とも200万年とも言われる。そんな気の遠くなるような時空を遡り、途轍もない想像力を駆使して、「人類の未開の過去の情景をこれほど感動的に且つ生き生きと描いた作家はロンドンをおいてほかにない」とまで専門の人類学者を唸らせた小説『太古の呼び声』（*Before Adam*, 1907¹⁾）を残したのは、ジャック・ロンドン（1876-1916）であった。そんな太古の物語に健筆をふるった彼が、そのわずか数年後に、今度は逆タイム・スリップ版とも呼ぶべき擬似 SF 作品『赤死病』（*The Scarlet Plague*, 1915）を著わした。それは、人類の未来の有りよう、いや、人類滅亡を予言し警告するという、これまた途轍もないパースペクティヴのもとに構想されたものである。「全人類が高度の文化から原始的な状態へと陥る無残さに逆もどりしていったこと³⁾」にかかわって、偶然生き残ったひと握りの人間たちのうちの1人が、その孫たちに「知られざる消えうせた世界の話」（p. 58）を語って聞かせるというのが物語のフレームで、その無残さをもたらした張本人が「赤死病」なる疫病だったというのである。

『太古の呼び声』の読後にこの『赤死病』を読むと、両作品の甚だしい時間的・空間的落差に驚くほかになく、少なからず戸惑いを覚えてしまうだろう。とりわけ『赤死病』では、一方にあらたに原始生活を始めたばかりの子孫がおり、もう一方には現代文明の極致に暮らした人間の世界が語り手の口を通じて甦る、というきわめて対照的な世界が同時進行するわけだから。

われわれの遠い祖先はどんな生き方をしていたのだろうか？という熱い問いかけとともに、20世紀末を迎えた今日、われわれ人類は果たしてどんな終焉の仕方をするのだろうか？という問いかけにも、高い関心が集まっている。核戦争、原子力発電、人口爆発、食糧危機、地球温暖化、オゾン層破壊、大疫病、ダイオキシン、大地震、……と、難問山積の現代文明社会だが、ロンドンが20世紀初頭に考えた人類終焉の仕方の可能性の1つに大疫病による人類滅亡という選択肢があった。そして彼は、その可能性を『赤死病』という作品に提示してみせたのである。

ロンドンには社会派 SF（あるいは社会派未来小説）ともいうべきジャンルもあって、ユニークな作品が散見できる。いわゆる純然たる SF（空想科学小説）とは呼べないかも知れないが、当時の社会事情を反映させた、ロンドン独自の領域である。なかでも、1976-1987の時代を想定し、中国の人口爆発と細菌投下による中国の死滅を描いた「比類なき侵略」（“The Unparalleled In-

vasion”)や、26世紀末の産業少数独裁政治下における極悪非道な強制奴隷労働を生々しく描写してみせた「奇異なる断章」(“A Curious Fragment”)などは特異なものだが、これらとはほぼ同一ジャンルにあって一段とスケールが大きく、ロンドンの文明観のいわば総決算ともいえるべきものを世に問うたのが、この『赤死病』である。わずか40年ではあったが、他に類を見ないほど波瀾に富んだ一生を送り、この作品の執筆から出版に至る年齢が34～39歳という、人生の最終段階にさしかかっていたことを考えると、酸いも甘いも噛みしめた彼の人生観が当然打ち出されているものと踏んでいいだろう。F・ウォーカーは、この作品を“…perhaps the best example in American literature of a genre today very popular, the survival novel.”⁵⁾と称したが、このサヴァイヴァル小説を書くことでロンドンには、果たしていかなるメッセージを後世に残しておこうと考えたのだろうか。

II

『赤死病』がマクミラン社から181ページのハードカバーで出版されたのは1915年の5月で、それはロンドンが他界するちょうど1年半前のことであった。ところがこの作品は、雑誌掲載後まもなく出版されるという慣行が踏襲されていない。執筆は、出版時点から5年も遡るのである。マクミラン社のG・P・ブレットに宛てた書簡がある。1910年4月1日にカリフォルニア州グレン・エレンから書かれたものである。“I have just finished a 20,000-word pseudo-scientific story entitled *The Scarlet Death*.”⁶⁾(この時には *The Scarlet Plague*ではなく、*The Scarlet Death*となっている点が気にならないわけではないが、これについては後述する。)この脱稿時点から2年余りも経た1912年6月に、ようやく *London Magazine* という雑誌に一举掲載されたようである。1912年6月4日に、“Receives 50 pounds for *The Scarlet Plague*”⁸⁾とあるから、間違いないだろう。アメリカでも雑誌連載されており、そのことは、同じくG・P・ブレットに宛てた1914年12月19日付の書簡に詳細に記されている。

It was published serially in the *American Sunday Monthly Magazine* beginning June 8, 1913 and being published subsequently on July 13, August 10, and September 14, 1913; September 14th was the concluding number of *The Scarlet Plague*.⁹⁾

1913年6月8日号から始まって、7月13日、8月10日、そして9月14日号と、都合4回にわたって連載された。脱稿された1910年から1年余りを経た1911年5月30日でも、‘Jack’s stock on hand: “The Scarlet Plague”’¹⁰⁾と原稿は手元にあり、さらに2年を経てようやく雑誌連載にこぎ着けた。1912年の11月18日に早々と、連載料306ドル66セントを受けとっている。けれども、単著として日の目を見るためには、この連載後さらに1年と8ヵ月を待たねばならなかった。彼が『赤死病』の著者献本数冊を落手したのは1915年7月16日のことで、初版部数も5,105と控えめであった。

作品が書かれてから5年もかかって1冊にまとめるという異例の長さや控えめの初版部数には、いくつかの要因が考えられる。まずは作品内容にかかわるものだが、F・ラカシンもそのことに

触れている。

“... a delay readily understandable in view of the nature of the text. In this science fiction short story, the last written by London and at the same time, the most despairing, are found the pessimism and
¹²⁾
 ...”

次に、そうした内容とも関連して、結果的にまとまった本の体裁からはオプティミスティックな印象など微塵も感じとれない点である。実物（19.5 cm×13 cm）大でコピーした表紙（次ページ）を見てみよう。これでは色はわからないが、全体的には茶色というか、プラム・レッドがベースになっており、タイトルと作者名および上部1/3には荒廃した都市のビル群の一部壁面等が、作品を象徴する朱色に近い赤で、あとはビルの上空が黄色になっている。ビルが燃えあがって炎と煙に包まれている様子は不気味である。要するに、この1冊を手にとった者に暗澹たる思いを抱かせるような表紙なのである。また口絵（p. 219参照）にしても、「世界全体が、炎に包まれているみたいだった」というキャプションが付いたもので、おまけに、上空の煙が何やら頭骸骨を思わせるような描き方までしてある。とにかく、中身の検証に入らずとも、そのタイトルと、1冊としての上記のような仕上がり具合からだけでも、何かおぞましいイメージが浮かびあがってくるのである。

さらには、ロンドンも言及している作品自体の短さが挙げられよう。上に引いた1914年12月19日付の書簡の冒頭で、彼は次のように書いている。

I am sending you herewith enclosed the manuscript of the book of mine that it has been suggested was to be brought out the first part of the year. It is entitled *The Scarlet Plague* and consists only of 20,657 words.

First of all, let us consider if its shortness militates against it being published as a book at the present time.
¹³⁾

つまりは、わずか20,657語から成る作品であり、マクミラン社のG・P・ブレットの側でも多少の難色を示したに違いない点なのである。

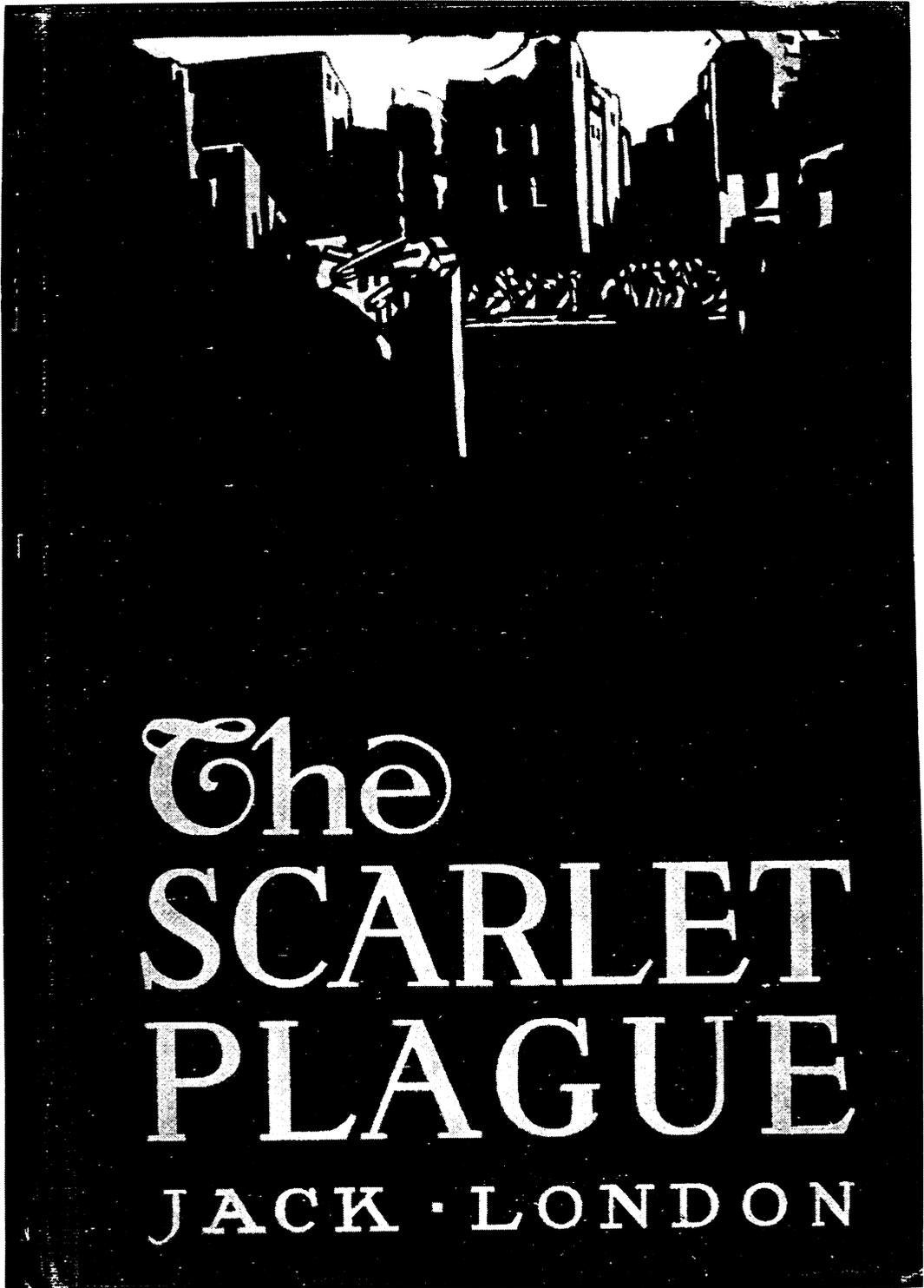
今日でさえ恐るべき作品と考えられているのに、まして今から90年ほど前ともあれば、いかに花形作家の作品とはいえ、時の編集者たちが大なり小なり掲載や出版を渋ったり躊躇したであろうことは想像に難くない。

したがってロンドンも、上掲の書簡文に続けて次のような2、3の提案まで行なっている。

It was written a couple years ago by me and yet it is so apropos of the present great war in Europe that one reading it for the first time now might almost think that I had written it as a satire on the present war in Europe. It is very apropos and I think has some chance of making some sort of a book.

My idea is that it could be published as a book selling for 90¢ or selling for \$1.00 along with a dandy set of illustrations.
¹⁴⁾

折しも同年6月28日にオーストリア皇太子の暗殺に端を発して始まった第1次世界大戦の風刺としてうまく乗せられないかというものであり、あとは本の価格とイラスト使用についての提案で



ある。本格的な世界戦争によるかつてない惨状と、赤死病が猛威をふるって世界を終わりに導くというイメージとをダブらせようとの思惑が働いている。果たしてこうした思惑が功を奏したのか、翌年5月にはイラストを配した『赤死病』がようやく上梓の運びに至ったのである。

ちなみに、この時期のロンドンはどのような実生活を送っていたのだろうか。1910年には34歳だったが、もう晩年にさしかかっていた。あのスナーク号による世界一周航海の挫折後は、グレン・エレンの大農園の経営・拡充に力を注ぎ、1911年には計26室を誇る「狼城」(Wolf House)の建築も始まっていた。おまけに、以後死ぬまで農園訪問客が絶えなかった。加えて執筆もあるわけだから、心身ともに疲労困憊していた。原稿料は稼いでも稼いでも、ほとんどそうしたことに消えていった。そこへもって飲酒癖が加わっていく。1913年には、その名声が最高潮に達していたにもかかわらず、収入よりも出費のほうが上まわっていた。そこへ、待ち望んでいた狼城が落成・入居の2、3週間前に炎上するという嘆かわしい不運に見舞われたばかりか、数々の不運や不幸が再起の出端をくじいた。早くも1911年には、自らの死後の遺体の処理の仕方についてまで指示を与えているほどである。

In 1911 London, in a sealed envelope, left instructions for the disposal of his body after death. He wanted no viewing, no funeral, and his remains to be cremated and the ashes spread over the “Beauty Ranch.”¹⁵⁾

以上垣間見たロンドンの晩年からも察しがつく通り、彼自身が死に対してかなりの不安を抱き、神経過敏なところがあったことは否めない。つねに死というものを強烈に意識していたわけで、それは何も晩年に始まったことではない。むしろ一生ついてまわったと言っても過言ではない。いわば死の系譜とでも呼ぶべき流れを辿ることすらできるのだ。代表作の1つである半自伝小説『マーティン・イーデン』(Martin Eden, 1909)にも、また酒と冒険の自伝的物語『ジョン・バーリコーン』(John Barleycorn, 1913)にも、死が随所に顔を出す。たとえば、『ジョン・バーリコーン』の中にこんな話が出てくる。少年の頃、酩酊してスループ型帆船に乗ろうとした際に、誤って水中に落ち、潮流に運び去られ、溺死寸前までいったというのである。

水の中に入って4時間後に、夜明けになると、私はメア島の明かりの沖の激浪の中で危険な状態にあった。そこは、ヴァレイホウ海峡とカーキーネス海峡から流れてくる速い引き潮がぶつかりあい、その瞬間に、それらがサン・パーブロー湾から流れてくる引き潮と再びぶつかりあって、洪水のような潮が逆巻いていた。激しい風がわき起こり、さざ波が執拗に私の口まで押し寄せてきて、私は塩水を飲みはじめていた。泳ぎを知っている者の知識で、終わりの近いのがわかった。¹⁶⁾

このほかにもアザラシ狩り船『ソフィア・サザランド』号による体験等々とともに、死と関係のある話が様々に語られている。また、ボクシング小説『試合』(The Game, 1905)の遊び紙や各章の頭に髑髏ないし骸骨のイラストを意図的に配してあるのも、そのことの表われである。したがって死は、暴力とともに、ロンドン文学の重要なキー・ワードの1つである。幼少の頃から生と死が拮抗しあう、まさに死と背中合わせの生活が少なくなかったことが、つねに彼に死を強烈に意識させたのである。生と死に関連して、若さと老いの問題、とりわけ老いかか体力の衰えを扱った作品も目につく(たとえば、「ひと切れのビフテキ」(“A Piece of Steak”)や「生の掟」(“The Law of Life”)など)。

このように早くから暴力や死と向きあうことの多かったロンドンが、晩年になって、さらに死に対する意識を深化させていったわけだが、『赤死病』では病原菌や疫病に対して強い関心を抱いていたことをうかがわせる。顕微鏡や超顕微鏡を使って病原菌を見る話 (p. 42) をさせているし、疫病に関する知識やそれに対する関心にも並々ならぬものがある。流行性感冒、^{インフルエンザ}黄熱病、^{ブラック・プレイグ}黒死病、結核 (以上 p. 46)、腺ペスト、眠り病、ハンセン病 (以上 p. 47)、十二指腸虫、1910年のペラグラ、さらには1984年のパントブラスト病 (以上 p. 48) なる疫病まで造りだしているからである。

では、タイトルの赤死病 (原題は *The Scarlet Plague* だが、主人公の老人は the Scarlet Death とも呼んでいる) という疫病名はどのようにして生まれたのだろうか？ これには、黒死病 (原文では the Black Plague としている) が下敷きになっていることは間違いない。黒死病を手元の事典で引けば、

1346～50年に全ヨーロッパを襲い、猛威をふるった疫病。この病気にかかったものは吐血、逆上し、腕やももにはれもの¹⁷⁾ができ、また小さな黒い膿瘍¹⁷⁾が現われた。そして、できものやはれもの現われた数日後には死んだ¹⁷⁾という。そこから黒死病 Black Death の名も出たとされる。… (中略) … 黒死病による被害は多大で、それだけで欧州の全人口の1/4ないし1/3が死んだと推定されている。… (下線筆者)

とある。ボッカッチョの『デカメロン』では、その惨状がいつそう生々しく克明に描かれている。その症状や状況を抜き書きしてみよう。¹⁸⁾

…股のつけねか腋の下にこわばった腫瘍¹⁸⁾ができて、その内のあるものは普通の林檎ぐらいに、他のものは鶏卵ぐらい大きくなり、また、あるものはその数が多く、他の者は少ないのです。しもじもではこれをペストの腫瘍とよんでおりました。(p. 20)

…徴候があらわれてから3日以内に、…発熱もせず、…死んでいきました。…それは病気の患者から健康者に、¹⁸⁾往来¹⁸⁾しただけで、伝染していった… (pp. 20-1)

…自分のこと以外には他のことなどかまわずに、…持ち物をすてて、…自分たちの田舎をさがし求めました。(p. 24)

…1人の兄弟は他の兄弟をすて、伯父は甥をすて、姉妹は兄弟をすて、またしばしば妻は夫をすてるにいたり、… (pp. 24-5)

街の通りで、昼となく夜となく、果てる者がいっぱいおりました。(p. 27)

どこもかしこも全部一杯でしたので、教会の墓地に大きな溝をつくり、そのなかへあらたに運ばれる死人が何百となくおさめられました。死人はそのなかに、まるで船に貨物をつみこむように、一段一段と溝の頂きに達するまで積み重ねられて、土をかぶせるのもやとでございました。…都市を苦しめていたこうした時代に、一方田舎も何ら仮借されるところがなかった… (p. 29)

ああ、過ぎし日に召使たちや紳士淑女でにぎわったのも昔の夢となり、大邸宅や、美しい家々や、高雅な住居から、今はいやしい身分の下男の果てにいたるまで姿を消し、ひとけのない空き家となっているものが、どんなに多いこととございましょう！ ああ、由緒すぐれた家系や、莫大な遺産、名だたる財宝で、正しい相続者を失ったものが、どんなに多いこととございましょう！ (p. 30)

ずいぶんと大雑把な間引き方ではあるが、黒死病がヨーロッパを襲った実状を知るには事足りるだろう。

では、ロンドンの『赤死病』ではこの疫病をどのように捉えているだろうか。少し長いですが、該当箇所を引用してみよう。

その最初の徴候が現われた瞬間から、1人1人が1時間で死んでしまうんだからな。中には数時間持つ者もおった。でも多くの者は、最初の徴候が現われて10分か15分以内に死んだよ。

心臓がそれまで以上に速く打ちはじめ、体の熱が上がりはじめるんだ。それから、まっ赤な発疹が出て、顔や体じゅうに野火のように広がるんだ。たいていの人は、熱と心臓の鼓動が増してくるのに気づかず、はじめて知るのは、まっ赤な発疹が現われたときだ。普通には、発疹が現われたときに、痙攣を起こすんだ。けれども、この痙攣は長くは続かないし、大してひどいものではない。それを切りぬければ、すっきり静かになる。ただ、しびれがたちまち足のほうから体へとはい上がってゆくのが感じられるだけだ。かかともからまずしびれ、それから両脚が、そして腰がしびれるんだ。そうしてこのしびれが心臓の高さにまで達したとき、そいつは死んでしまう。わめいたり眠ったりしない。心臓がしびれ停止する瞬間まで、心はつねにあわてず落ち着いたままだ。それに、もう1つわけがわからないのは、分解の速さだ。人が死ぬとすぐ、体は見るみるうちに粉みじんになり、ばらばらに飛び散り、溶けてなくなってしまふみたいだった。(pp.54-5)

さらに第4章では、赤死病が猛威をふるった結果、絶対安全と目され400名以上も入った大学の化学棟も、やがて「納骨堂と化し」(p.88)て、街からの脱出を図った47名にしても、30名、11名、3名と減り、ついに主人公の老人(赤死病発生当時は、カリフォルニア大学教授)だけが残るという惨澹たる状況を呈することになる。

このように歴史的事実としての黒死病とロンドンの想像的産物としての赤死病とを比べてみると、細部は異なるものの、ロンドンがいかに黒死病に多大の関心を寄せ、様々な角度からこれを自らの作品に取りこんでいたかが読みとれる。とりわけ、彼の想像力が飛翔し、黒死病によってヨーロッパの全人口の1/3まで(その数2,500万人以上)が死亡したという事実とかかわって、「農民の数が激減し、彼らから地代をとりたてる領主階級の収入が減ったことは、封建制度の崩壊を促進したと考えられている」¹⁹⁾点などから、視点をヨーロッパから世界全体へと移し、文明社会構造そのものを揺るがすどころか、根こそぎにし、文明の息の根を止めてしまうところまで及んだことは、特筆に値する。また、「疫病が悲惨なのは、健康でいた人が、理由がわからないままにつぎつぎと斃れるからである」²⁰⁾の専門家の指摘の通り、赤死病の場合にも、老人の教え子の女子学生に突如として襲いかかった例が示される。

…コルブラン嬢といって、わしの学生の1人でな、教室の、わしのすぐ目の前にすわっておった。わしは、喋りながらその子の顔に気がついた。いきなりまっ赤な色に変わったんだ。…(中略)…コルブラン嬢の痙攣はごく軽いもので、1分間も続かなかった。…(中略)…

「わたしの足が！ 感覚がまるでなくなっちゃったわ」

1分後に彼女はこう言ったよ。「足がないわ。足がある気がしないの。それに、膝が冷たいわ。膝があるという感じがほとんどしないの」

彼女はひと束のノートを枕がわりにして、床に横になった。それでもわれらは、どうすることもできなかった。冷たさとしびれとが徐々に腰から胸へと広がっていった、それが心臓に達したとき、彼女は死んでいたよ。時計では15分で——わしは時計を計ってたんだ——彼女は死んだよ、その場で、わしの教室で、死んだんだ。しかも彼女は、とてもきれいで、丈夫で、健康な若い女性だったんだ。なのに、その疫病の最初の徴候が出てから死ぬまで、たったの15分しか経過していなかった。それからしても、赤死病がどん

なに速いものだったか、おまえたちにもわかるだろう。(pp. 58-9)

したがって、赤死病の出現があまりに突発的に過ぎるといった非難は当たらない。

無論、コレラや天然痘のこともロンドンの予備知識としてあったに違いない。それは、「コレラの伝染力の強さ、急性症状、高い死亡率」「コレラが世界流行を始めたのは1817年以降のこと²¹⁾」、そして「19世紀から20世紀初頭にかけて発生した世界的なコレラの大流行は6回あった²²⁾」といった事実によっても明らかだし、当然ロンドンもそれらを踏まえていたであろう。

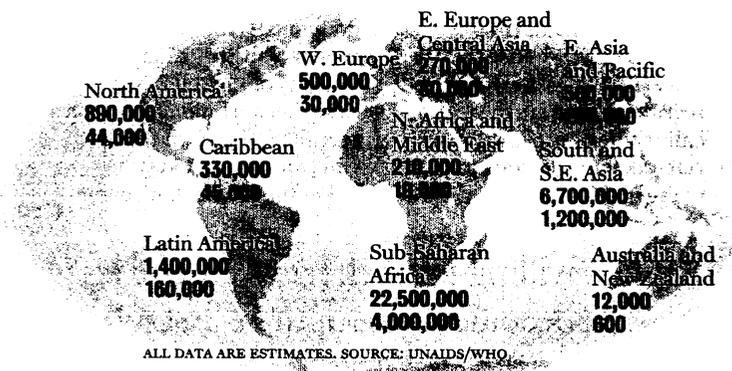
突発的であるという点と、赤死病に類似しているという点では、エボラ出血熱にも言及しておかないわけにはいかない。この現代の恐るべきウイルス病が「初めて人類の前に登場したのは76年、スーダン南部のヌザラだった²³⁾」という。その症状といい致死率といい、まさにロンドンの想像した赤死病を彷彿させる。こうした新種の、しかも最悪とも言えるウイルスが実際にその姿を現わすとなると、ロンドンの赤死病は俄然現実味を帯びてくる。単なる絵空事、別世界のことと片づけてしまうわけにはいなくなる。

世界を、いや人類を虎視眈々と狙っているのは、今やエボラ出血熱だけではない。エイズ(AIDS=後天性免疫不全症候群)も、きわめて手ごわい相手である。*Newsweek* (July 5, 1999, p. 24) は、“WORLD AFFAIRS”のページで、保菌者と感染者の数を世界10地域に分けて紹介、その数が富める国々と貧しい国々とのあいだで二極分化していることを指摘している。参考までに、その分布図を掲げておく。

Two Worlds, Not Just One

Expensive drugs have eased the AIDS crisis in rich countries. But in poor ones, new infections—and the death toll—keep growing.

Living with HIV/AIDS: **33.4 million** Infected in 1998: **5.8 million**



さらには、ロシア南部で「原因不明の出血性の熱病が流行²⁴⁾」しているとの報道もあり、エボラ出血熱やエイズとともに、疫病の今日の状況はまったく予断を許さない。90年も前のロンドンにはこうした状況を予見すべくもなかったわけだが、すでに見た黒死病やコレラの大流行といった既成の事実に立脚しながら、大疫病による人類滅亡の可能性を確信ないし想定していたとすれば、『赤死病』はまさに現代文明への予言と警告の書たり得ていると言えよう。

III

物語の書きだしというものは、つねに難しい。『太古の呼び声』の場合と同様、『赤死病』の場合にも、舞台背景それ自体はきわめて単純なものである。ストーリーにしても、それほど込みいったものではない。すなわち、繁栄を極めた人間社会に突如として赤死病なる伝染病が襲来する。それが西暦2013年のこと。そしてこの疫病によって、人類が滅亡してしまう。その時から60年を経た2073年、ごくひと握りの人間だけが生き残り、すっかり原始社会と化したところで、生き残りの1人である老人が孫たちにその経緯を話して聞かせる、という筋立てになっている。それだけではあまりに不自然そうだが、様々な工夫がなされ、技法も駆使されており、結構リアルな仕上がりを見せている。そのあたりを拾い出して、検討を加えてみよう。

『太古の呼び声』には、夢という仕掛けが導入部の第1・2章に巧みに用意され、読者はもののみごとに100万年も200万年も大昔の世界へと誘われた。それが『赤死病』では、逆に（発表当時からすると）100～160年ほど先の未来が想定されている。今日のわれわれからしても、赤死病の発生する2013年は目前のことではあっても、2063年となると、まだ60年ほど先のことである。それも、第1～4章のようにわれわれと同一の時代を扱った章ならまだしも、とりわけ書きだしの第1章は現代文明世界崩壊後60年を経た世界から始まっているのである。

道は、その昔盛り土をして鉄道線路が走っていたところに続いていた。列車がそこを走らなくなってから、もう長い年月が経っていた。両側の森が盛り土の斜面にまで押しだしてきて、木々や茂みが緑の大波となって、道をふさがんばかりになっている。小道の幅は、せいぜい大人1人が通れるぐらいであり、野獣の通り道程度でしかない。あちこちに錆びた鉄が、森の腐植土の間から顔をのぞかせており、レールと枕木がまだ残っていることを示している。あるところでは10インチの木が、レールとレールのつなぎ目から生えており、レールの端を持ちあげているのがはっきりと見える。枕木は見たところではレールにつき従い、その路盤が砂利や腐った木の葉で埋まるぐらい長い間犬釘で留められていたものだから、今ではぼろぼろに腐った木が、おかしな角度に突きだしている。この路盤は古くはあったが、明らかにモノレール型のものであった。(pp.6-7)〈傍点筆者〉

こうした書きだしに、読者は一瞬異和感ないしは戸惑いを覚える。われわれに馴染み深い文明のあれこれが消えて久しい世界が、物語の冒頭から正面切って出現するわけだから。だからといって、歯の浮くようなSFなどでは決してない。姿を消して久しい文明世界の残滓（傍点を打った語句）がきちんと描きこまれているあたりは、心憎いばかりである。鉄道は、いわば現代文明の象徴の1つ（ロンドンの時代にあっては、象徴そのものであった）であり、それが完全に機能しなくなって無残な姿をさらしていることには、大きな意味がある。やがて現われる第2章までと、それ以降の第3～4章の文明のまったただ中とをつなぎ止める働きを担っているからである。

このほかにも、第1章の書きだしの難しさ・出だしの単純さをカバーしている工夫についても見ておこう。上に引いた書きだしの一節にも現われるものだが、数種類の色を配置しているのが目に留まる。順に重複しないように拾ってみると、「緑」に始まり、「白」(p.7)「褐色」「ブルー」(p.8)「錆色」(p.13)「灰色」(p.14)「鮭肉色」(p.17)「白」(p.19)そして最後に「赤」と

「深紅」(red と scarlet が使い分けられている)といった色である。色だけではない。音やにおいまでが織りこまれている。「サラサラ」「ブンブン」(p.8)「パキパキ」(p.9)「寄せ波の音」(p.15)「ほえたりどなったりする声」(p.16)「ジュージュウ」「パカッ」「ベチャクチャ」「ブツブツ」(p.18)「舌鼓を打って、菌莖をクチャクチャいわせながら」(p.20)「ピューッと音」(p.23)などだが、いわゆる五感に訴える語句や表現を適度に配することによって、喧騒の文明世界が一変して、静寂この上ない世界(その意味では『太古の呼び声』の世界も同一)の出現で、ともすると単調になりがちな情景描写に動きや臨場感を与えている。さらに、登場人物といえば老人と3人の孫たちの計4人にすぎないのに、数々の動物を配することで、静的な情景に躍動感をも加えている。すなわち、熊、うさぎ、やぎ、犬、アシカといった面々である。以上のような工夫が満遍なく描きこまれ、重要な書きだしの第1章を引きしめているものと考えられる。

次の第2章では、同じ老人によって病気(病原菌)の話が語られていく。この章の特徴は、原始時代へと逆もどりした世界にあって、「十以上数えられない」(p.33)鳥並みの孫たちに老人が数の数え方を手取り足取りして教える様である。砂粒から始めて、小石(100)→貝殻(1,000)→骸骨の歯(100万)→カニの甲羅(10億)といったふうに教えていく様子は具体的で、想像力と説得力に富んでいる。そして後半部には、上述した疫病に関する作者の造詣の深さがよく表われている。

3点めは、第3章である。いよいよ赤死病発生状況の具体的説明がなされる。「あの疫病が発生したのは、2013年の夏だった。わしが27だったから、そのことをようっく覚えとる」(p.52)でもって老人の話が始まる。読者は2013年時点、すなわちコンテンポラリーな次元へと引きもどされる。ようやく、馴染み深い現代文明世界のまっただ中に置かれるわけだ。文明の頂点を極めたと言ってもいい世界が、そこにはある。現われる地名なども、ポピュラーなものばかり。第1・2章に出現したまったく異様な世界から入った読者が、第3章に至って何がしかの安堵感を抱くのは、それほどこの文明世界にどっぷりと安住してきたことの証左であろうか。ニューヨーク、シカゴ、ロンドン、ベルリンといった世界的な大都市名は言うに及ばず、この作品の舞台となっているカリフォルニア州はサンフランシスコ帯の、いわゆるベイ・エリアの諸地名がふんだんに現われる。少なくともこの地域に馴染みのある読者なら、上記の文明世界に重ねていっそう親近感を覚えるだろう。オークランド、バークリー、サクラメント川等のほかにも、カリフォルニア大学やパロウ・アルトウにあるスタンフォード大学まで顔を出す。また、章が移って、第4章の終わりから第5章、さらに第6章にかけて、生き残った者たちは死の街を脱出して田舎へと逃げのびるわけだが、通過する町や村の名前も馴染み深い。フルートヴェイル、ハイワーズ、リヴァモア谷、サン・フワーン、テメスカル湖、アラミーダ丘陵、カーキーネス海峡、コントラ・コスタ丘陵、ポート・コスタ、ヴァレイホウ、ソノーマ谷、グレン・エレン等々といった作者ゆかりの地までも、ぞくぞくと書きこまれている。さらに付け加えれば、人類滅亡後にひと握りの生き残りたちによって再構成される部族名にも、サンタ・ロウザ族、ユタ族、ロスアンジェルス族、カメル族といった同じく馴染みの地名を当てている。

第3章や第4章の、この世の地獄ともいふべき大混乱状態や殺戮等を描くロンドンの筆力には定評があり、いわばお手のものだが、文明の終焉のあとの静まり返った単調な状況で、しかも登場人物の数も限られるとなると、今取りあげたようにひと工夫もふた工夫もしないと緊迫感を維

持できないだろう。

4点めの特徴として、dichotomy（2分法）がこの作品にも散見される。作品の冒頭（前掲の第1章第1節）の直後から、老人と少年（エドウィン）が登場する。老人は87歳になっており、少年は12歳ぐらいである。他の2人の少年（フーフーとヘア・リップ）とも際立って対照的に描かれている。老（=旧）と新の意味において、第3・4章では老人も若く（27歳）、社会の指導者として活躍しているのに、この2つの章をはさむようにして第1・2章と第5・6章では、見るも哀れな老人と化し、文明崩壊後の荒野に生まれ育ってきたまったく新しい世代としての少年たち——人類の再出発を象徴する若い世代——が台頭してくる。

…わしは自分が汚い年寄りで、やぎの皮をまとい、原始時代のような荒れ野でやぎの番をしている野蛮な孫たちと歩きまわっていることを忘れてしまうんだよ。（p. 44）

が、時の経過やその落差をよく伝えていると思われる。老人は、旧（？）文明と原始ないし野蛮な再出発とのつなぎ役を果たしているのである。

対比描写といえ、*「赤死病」*の呼称にも2通りある。すなわち、the Scarlet Plague（あるいはDeath）とthe Red Deathの2種類である。まずScarletとRedの違いについてのやり取りがある。

「あの病気は、^{スカーレット}深紅の色だった。顔や体が全部、1時間で^{スカーレット}深紅の色に変わってしまった。わしは知っとるんだ。もうたくさんというぐらい見たんだ。わしが^{スカーレット}深紅の色だったと言ってるわけは——そうだな、^{スカーレット}深紅の色だったからだ。ほかにふさわしい言葉がないんだよ」（p. 25）

と、老人が説明する。その表現の仕方にも、文明と、始まったばかりの原始生活者との隔たりがよく表われている。（PlagueとDeathの違いにも同じことが言える。）高度に発達した文明段階における、より正確な定義と、それよりはずっと曖昧なthe Red Deathとが、上述の老人と少年たちの対比に鮮やかに重ねられている。あるいはthe Red Deathをタイトルに使用しなかったのは、後述するE・A・ボウの短篇「赤死病の仮面」（“The Masque of *the Red Death*”, 1841）（下線筆者）との類似を嫌ってか、あるいは向こうを張ってか、*The Scarlet Plague*としたのかも知れない。

もう1つ興味深い対比は、第5章に登場する元おおかえ運転手のビルと元世界最高の大金持ちの娘だったヴェスタ・ヴァン・ウォーデンの取りあわせである。2人とも赤死病にはかからず、偶然ヴェスタはビルのもとなる。疫病の発生以降、2人の立場は逆転する。ビルは、「見下げはてた原始人で」（p. 113）あり、「毛深い猿みたいな人でなし」（p. 117）で、あの『太古の呼び声』における突然変異とも呼べるキャラクター赤目に相当する。もし文明世界が存続していたら、決して起こり得なかったであろう取りあわせが、皮肉にも起こったのだ。同じことが、第6章にも現われる。数少ない生存者たちが、それぞれの配偶者を見つけるのだが、通常であればあり得ない、異例の組みあわせである。

粗雑で無学な農夫ヘイルには、イザドアという女が当たってな。彼女は、疫病をうまく切りぬけた女たちの中では、それは抜群にすばらしく、ヴェスタの次だったな。世界で最も有名な歌手の1人で、疫病が発生したときはサンフランシスコにいたんだ。彼女は、わしと一時に何時間も話したよ。いろんな冒険を経ついに、メンドシーノウ保安林でヘイルに救われて、彼の女房になるしかなかった、といった話をな。

それでもヘイルは、読み書きはできなかったが、いい男だった。彼は正義としかるべき待遇ということについて鋭敏に知っており、おかかえ運転手と一緒にいるヴェスタより彼女のほうがはるかに幸せだった。(p. 122)

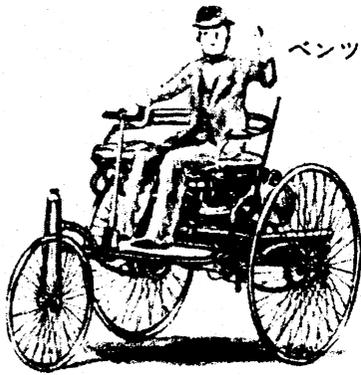
人類のほとんどが死滅してしまったとあっては、生き残ったひと握りの人間たちにとっての限られた選択とはこういうものなのか、を痛切に感じさせる。但し須山静夫が言う、

「赤死病」*The Scarlet Plague*, 1915の話者は、やはりカリフォルニア大学の英文学教授である。このような社会の上流階級に属する人々に対するロンドンの態度には、憧れが見られることはあっても、皮肉な批判的なものは見出すことができないのである。²⁵⁾

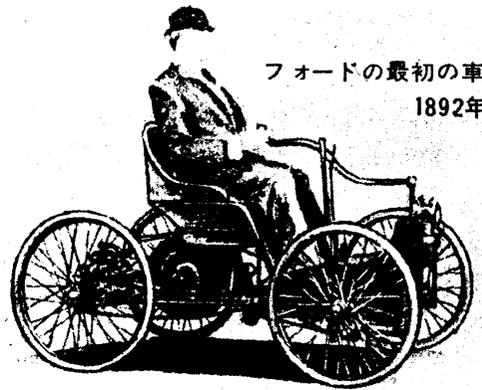
の、特に「皮肉な批判的なものは見出すことができない」は当たってはいない。たとえば『マーティン・イーデン』にしても、当初は上流階級に憧れを感じた主人公が、やがて失望を感じ、批判的になっていく。同様に『赤死病』においても、カリフォルニア大学英文学教授であれ、博士であれ、億万長者であれ、世界的に有名な歌手であれ、猛威をふるう大疫病の前には打つ手もなく、結果的に何の力も発揮できずに死んでいく（たしかに、語り手は生き残りはしたものの、いたわしい醜態をさらしているばかり）のである。「教育」も「家柄」も、赤死病を前にはなすすべもない。むしろそうした指摘や「批判的なもの」のほうこそが、作品の底流をなしているのではないだろうか。

5点めとして、この作品が垣間見せる時代性にも着目しておきたい。イラストにも触れながら、未来予測の観点から主として自動車と飛行機を取りあげてみる。まずは、草創期の自動車から見てみよう。²⁶⁾

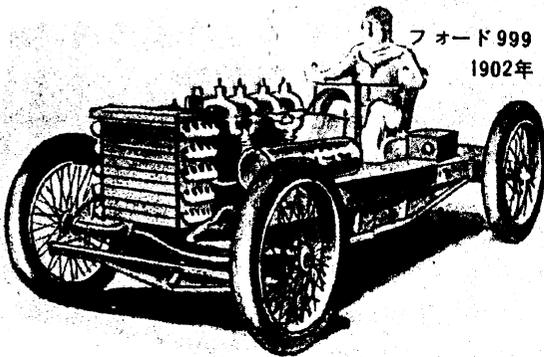
ベンツの三輪自動車がお目見えしたのが1885年、アメリカではフォードの最初の車が1892年、フォード999が1902年、1908年に出たキャデラックでも人力車に4つの車輪をつけたような形をしていた。（ロンドンの死後7年を経て、あのフォード“T”クーペが登場するが、これが乗用車としては初の屋根つきであった。）いずれにせよ、アメリカにおいては、1900年代に入って自動車の大量生産が可能となり、めざましい進歩と普及を遂げていった。（1908年には自家用車の登録台数が8千台であったのが、1915年には233万台と、驚異的な伸びを見せている。別の数字で見ると、1910年には200人に1台だったのが、1915年には15人に1台という普及ぶりなのである。）ロンドンには、自動車のこのちょうど急伸張期に生きあわせたことになる。ただきわめて残念なのは、25点のイラストのなかに自動車が描かれていないことである。赤死病発生の2013年を想定して、1910年時点から100年先の自動車をどのように思い描いていたのか、今日の読者としては興味津々たるものがあるのだが。ただ、出版社（あるいはイラストレーター）の側としては、自動車の草創期ともいえるこの時期に、100年も先の文明の利器としての自動車の外観を「こうだ」と画き残すことには、大なる不安とためらいがあっただろう。むしろ、100年後のわれわれ読者に（あるいはどの時代の読者にも）、今日のような（あるいは各時代の）自動車の外観を思い浮かべながら読ませるほうが無難であり、自然であろう、との判断が働いたのかも知れない。もっとも、この作品では自動車の出番は限られており、それも、文明批評の対象の1つとして捉えられていると見ることのほうがより意味があるだろう。



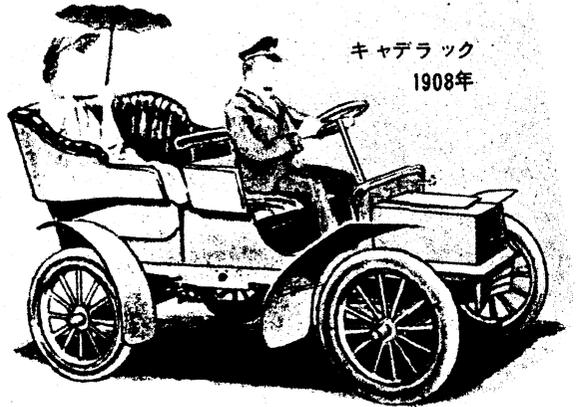
ベンツの三輪自動車
1885年



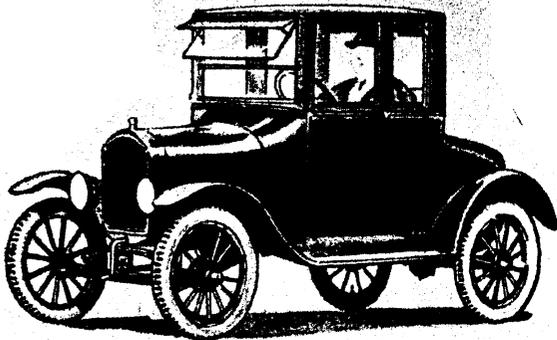
フォードの最初の車
1892年



フォード 999
1902年



キャデラック
1908年



フォード "T" クーペ
1923年

動かなくなった自動車がいっぱいあったが、それは、ガソリンと修理工場のエンジン部品とがなくなってしまったからだ。(p. 74)

わたしの何人かは、民家の車庫をあちこち偵察して、ガソリンを捜した。けれども、このほうはうまくゆかなかった。都市からの最初の大脱出によって、そういう役に立つものは何もかも一掃されてしまっておった。(p. 92)

ナイルズの先の、幹線道路のまん中で、ワットホープを見つけたよ。自動車は故障しており、そのの、地面に広げた敷物の上には、彼の妹と母親と彼自身の遺体が横たわっておった。(p.95)

などは、車文明社会の今日を見越した達見と読めるだろう。いったん大事が起これば、文明の利器も無用の長物と化してしまう可能性を示唆しているからである。

自動車のほかにも、飛行機(ないしは飛行船)が登場する。ロンドン自身が飛行機に乗るという経験はまずなかつた²⁷⁾だろうが、飛行機もやはり自動車とともに1900年代に大きな脚光を浴びた。



“POURING OUT OF THE CITY BY MILLIONS”

しかし、『赤死病』が出版された1913年5月の時点でも、せいぜい時速200 kmほどで、今日からすれば想像を絶する飛距離と時速である。こうした事実を見据えて100年先の航空機を想像するのは、ほとんど不可能に近いことだったに違いない。が、こちらはイラスト2枚に描かれている。このうち1ページ大のもの(p.67)を原寸大で掲げてみよう。飛行機および飛行船と思われるものが飛んでいる。このイラストを見るかぎり、およそ2013年の空模様とは言いがたいが、自動車の場合と同様今日の飛行機がそれほど長足の進歩を遂げたということである。ちなみに、1999年現在の旅客機の実態²⁸⁾をのぞいてみよう。国内線のテクノジャンボ(B747-400)で全長70.7 m、全幅59.9 m、巡航速度Mach 0.85、航続距離3,830 km、標準座席数569である。小さなもの

(A320)でも、全長37.6m、全幅34.1m、巡航速度Mach 0.77、航続距離3,040km、標準座席数166となっている。これが国際線になると、同じテクノジャンボで全幅70.67m、全幅64.44m、巡航速度Mach 0.85、航続距離12,370km、標準座席数337であり、小さなもの(B767-300ER)でも全長54.94m、全幅47.57m、巡航速度Mach 0.80、航続距離11,000km、標準座席数204である。長さ・大きさ・速度・座席数のいずれをとっても、今日のわれわれ一般人でさえ信じられないデータなのだから、まして飛行機が現われて間もない頃とあっては、100年先のこうした現実を誰が予測できたであろう。イラストレーターや作者を責めることなど、到底できはしない。むしろ、100年前に想像された飛行機のイメージと今日の実際の飛行機の落差(時代性と時代間ギャップ)に注目すべきだろう。

6点めとして、人口の推移についての記述が果たす役割について触れておきたい。赤死病発生当時、サンフランシスコには400万(p.34)、湾岸地域全体で700万(p.35)、さらには

「…2010年の人口調査では、世界全体で80億の人間がいた…(中略)…1800年には、ヨーロッパだけで1億7千万人いた。…(中略)…1900年には、ヨーロッパに5億人いた…(中略)…2000年になると、ヨーロッパに15億人いた。…(p.36)

あるいは、2013年のニューヨークの人口が1700万(p.52)といった数字が、老人の口を通して語られる。それにしても、何を根拠にこのような数字がはじき出されたのだろう。執筆当時からすれば100年余りも未来のことであるから、予測は単なる予測でしかないのは当然だとしても、たとえば、1800年のヨーロッパの実際の人口は2億300万²⁹⁾であって「1億7千万」ではない。1900年の同じヨーロッパの人口も、4億800万であって「5億」ではない。執筆時点ですでに出ている実数であるのに、この誤差である。2000年になると、実際(7億3千万)とは大きく食い違って、「15億」としている。これなどは、おそらく当時の増加率をベースに算定されたものなのだろう。世界の人口の場合も、2010年には「80億」と踏んでいるが、最近の推計³⁰⁾によれば、1999年で60億(現に国連人口基金は、1999年10月に世界の人口が60億に達した、と発表している)、2011年でも70億、2023年になってようやく80億としている。こうした予測に誤差が生じるのは当然で、それは昔も今も変わらない。人口増加率の増減、高位・中位・低位推計の差、天災や戦争や疫病の発生等々によって変動可能だからである。したがって『赤死病』の文脈からは、人口の数値の誤差を云々するよりも、このような未来小説という形式では、上記のような数値を書きこむことがストーリーのリアリティを補強するのにひと役買う仕かけの1つになっていると見なすべきだろう。最終章になっての「わしの見当では、現在の世界の人口は350から400人といったところだな」(pp.124-5)などは、人類がほぼ死滅してしまったあとの世界の俯瞰図を目にするようで、際立つて印象深い。

7点めには、この作品のとりわけ第3章および第4章の赤死病発生による大混乱の描写が、1906年4月18日早朝に実際にサンフランシスコ一帯を襲った大地震(M8.3であったとされる)の影響を大きく受けている点を挙げることができよう。それは、ロンドンの長女ジョウン・ロンドンによっても

Jack never forgot the scenes he had witnessed during that day and night of terror and destruction. They reappeared with telling effect years later in his fantastic *The Scarlet Plague*,…³¹⁾

と指摘されている。具体的に作品に沿って見てみよう。

ニューヨークの警官隊の1/3が死んでおった。そのボスも死んでいたし、市長だって同じように死んでいた。法と秩序はすべて停止してしまった。死体は、埋葬されないまま通りに横たわっていた。大都会へ食べ物や何やかやを運んでくる鉄道や船もみな走るのをやめ、腹をすかした貧乏人が暴徒となって店や倉庫を略奪しておった。殺人や強盗や酒びたりといったことは、どこにでもあった。(p. 64)

あたりから始まって、

パークリーではおびただしい数の火事が起こっており、一方オークランドとサンフランシスコは、どう見てもひどい大火に見舞われているようだった。炎上している煙が天空をおおっていたから、日中でも暗いそがれ時みたいで、風向きが変わると、時々太陽がぼんやりと冴えない赤い球をのぞかせるんだ。なあみんな、正直なところ、それはまるでこの世の終わりの最後の数日みたいだったよ。(p. 74)

食料品店があったな——食べ物を売っているところだ。その店の男——わしはそいつをよく知っておったが——おとなしくてまじめなんだが、馬鹿で頑固なやつ——そいつが店を守っておった。窓やドアなど割って入られていたが、そいつは店の中において、カウンターの後ろに隠れており、舗道にいて押し入ってくる大勢の男たちめがけてピストルを発射しておった。入り口のところには、死体がいくつか転がっていた——その日の早いうちにそいつが殺した男たちの死体だ、とわしは判断した。遠くから見ていても、強盗の1人が隣の店——靴を売っているところだ——そこの窓を割り、わざと放火するのが見えたよ。わしは、食料品屋を助けには行かなかった。そんなことをするときなど、すでに過ぎてしまっていたんだ。文明は崩壊しつつあって、めいめいが自分のことしか考えなくなっておったんだよ」(p. 75)

酒に酔っぱらった状態が広まっていて、たびたび連中が、淫らな歌を歌ったり、気が狂ったように叫んでおるのが聞こえた。世界が崩壊して連中のまわりで廃墟と化し、そこらじゅうが炎上する煙でいっぱいになっているとき、こうした下品なやつらは思いのままに凶暴に走り、戦い、酔っぱらい、死んだ。それでも結局のところ、どうってこともなかった。誰もかれもが、どっちみち死んでいった。良いやつも悪いやつも、有能なやつもか弱いやつも、生きるのが大好きなやつも生きるのを拒絶するやつもだ。みんな死んでいった。何もかもが死んでいったんだ。(p. 82)

と、この世の地獄そのものと言ってもよいような状況が写しとられている。これなどは一部にすぎない。殺人、強盗、略奪、こそ泥、火薬庫の爆発、大火、大脱出等々の描写力は、冴えに冴える。このような臨場感あふれる場面のもとになったのが、ロンドン自身もはせ参じて目にしたサンフランシスコ市街地の惨状であったのだ。

最初の衝撃から12時間足らずで、ジャックとチャーミアンは荒廃の中にいた。水曜日は夜通し、2人は、今は破壊の炎の道筋にあたる旧ブロードウェイをはじめ、よく行くなじみの場所へとさまよいて歩いた。たえずダイナマイトが爆発して耳をつんざくような状態の中、ファンストーン将軍とその部下たちができるかぎりの救助をしようと勇ましく奮闘していた。火と戦うことは水がなければどうにもならない仕事だが、彼らは勇敢に力を尽くした。チャーミアンによれば、少なくとも40マイルは歩いたあと、ノブ・ヒルの入り口のところで縮こまって、夜明けまで眠った。それから、ミッション通りの瓦礫の中をドック地帯まで突き進むと、オークランド行きの渡し船をつかまえ、正午に27番通り490のベッドに転がりこんで、まる24時間眠ったのだ³²⁾。〈傍点筆者〉

1906年の大地震の体験と被災地を目のあたりにしたことが、こうして『赤死病』の中にみごと

に活用されたばかりか、ロンドンの文明観に結論的ともいえる肉づけを与えたのである。

8点めに移ろう。自然主義作家ロンドンであれば、初期の作品から一貫して弱肉強食・適者生存の思想が流れているわけだが、生存中に出版されたものとしては最後の部類に属する『赤死病』においても、それは健在である。このような作品の性格上、そうした傾向が見られるのは至極当然のことではあるのだが、ここでは代表的な一節（老人の言葉）を引用するにとどめる。

異様だったのは、どの家畜にも起こっていることだった。いたる所で狂暴になり、共食いをやっているんだ。鶏とあひるがまっ先にやられ、豚がまっ先に狂暴になり、猫がこれに続いた。犬も、変化した状態に順応するのにそれほど時間はかからなかった。まぎれもない犬の疫病だって起こっていた。犬たちは、死体をむさぼるように食い、夜の間には近くでも遠くでもほえ立て、昼間は遠くをこっそりと歩きまわっていた。時が経つにつれ、わしは犬の行動に変化を認めたよ。最初は互いに距離をおき、えらく疑いぶかなくて、けんか早かった。ところが、そんなにしないうちに、集まってきて群れをなして走りだしたんだ。犬というのはだな、つねに群居する動物で、人間に飼い慣らされる前からそうだったんだ。あの疫病が起こる前の世界の最後の頃には、ひじょうに違った種類の犬がいっぱいたんだ——毛のない犬、暖かくて柔らかい毛におおわれた犬、アメリカライオンほどの大きな犬にすればほんのひと口にもならないほど小さな犬とかな。それで、そうした小さな犬はみな、それに弱い種類のものは、仲間に殺されたよ。加えて、ひじょうに大きな犬も荒野の生活には適応できなくて、いなくなってしまう。その結果、多くの違った種類の犬が姿を消し、あとに残ったのは、おまえたちが今日知っている群れをなして走っている中型の狼のような犬というわけだ」（pp. 98-9）〈傍点筆者〉

9点めとしては、これまでの作品論でも取りあげてきたことだが、この作品にもイラストが散見できることである。ゴードン・グラント（Gordon Grant）によるもので、計25点入っている。内訳は、1ページ大のものが口絵を含め7枚、半ページ大のものが9枚、小さなものが9枚となっている。総計181ページとなつてはいるが、見返しや遊び紙、とびら等まで含めているし、本文の書きだしは11ページからであったり、各章の終わりや始めに空白ページがあったりするの、実質155ページほどである。したがって、平均6ページに1枚のイラストを載せている勘定になる。このうち、3枚（口絵、老人の顔、半ページ大のもの）を原寸大で次ページに掲げておこう。これらのイラストが、『赤死病』という短い作品に1冊の著作物として成り立ち得るページを確保したことはたしかだが、『太古の呼び声』の場合と同様、作品の性質上読者の想像力を補っていることも忘れてはならない。

最後に10点めとして、短くはあっても比較的よくまとまった『赤死病』だが、難点がないわけではない。最終章において、新しくいくつかの部族ができ、「あらたな文明」（p. 124）を目指すのはいいとして、老人の発言中、

今から百世代もすれば、わしらの子孫はシエラ・ネヴァダ山脈を越えはじめ、世代ごとに大きな大陸を越えてゆっくと徐々に進出し、東部を植民地化するだろう——新しいアーリア族が次第に世界じゅうに広まってゆくということだ。（p. 125）〈傍点筆者〉

の傍点を打ったあたりに妙に引かかるものがある。問題は、アーリア族をどう促えているのかということだ。第1に、赤死病が世界を征服してしまったとはいえ、アメリカの他の地域はおろか、ヨーロッパやアジアやオーストラリアやアフリカ等のことも模倣としている。第2に、仮に第1がその通りだとしても、なぜ「アーリア族」だけが特別に生き延びて、新しい文明の階段を



ALL THE WORLD SEEMED WRAPPED IN FLAMES



登りはじめるというのだろう。世界の他の地域にあっても、赤死病の難を逃れた者が大勢いたであろうし、そのなかには白人も黒人も黄色人もいたはずである。こうした「アーリア族」の特別扱いは、残念ながら玉に傷と言うべきだろう。

以上、『赤死病』という特殊な物語に特有の技法なり特徴なりを探ってみた。ロンドンの他の作品と共通するものもあれば、この作品に固有のものもあるが、いずれにせよ舞台設定やプロットの運びの点で読者を最後までつなぎとめておくことが相当に難しいこの種のストーリーにおいて、それらはきわめて有効な手法たり得ていると考えられる。

IV

『赤死病』には、いわゆる終末論的世界観が濃厚である。『旧約聖書』の「創世紀」の第6～9章にも、有名なノアの箱舟の話が登場する。

時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた。神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからである。そこで神はノアに言われた、「わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。…（中略）…わたしは地の上に洪水を送って、命の息のある肉なるものを、みな天の下から滅ぼし去る。地にあるものは、みな死に絶えるであろう。…（中略）…わたしは40日40夜、地に雨を降らせて、わたしの造ったすべての生き物を、地のおもてからぬぐい去ります」。…（中略）…鼻に命の息のあるすべてのもの、陸にいたすべてのものは死んだ。地のおもてにいたすべての生き物は、人も家畜も、這うものも、空の鳥もみな地からぬぐい去られて、ただノアと、彼と共に箱舟にいたものだけが残った。³⁴⁾

これを読むと、『赤死病』のフレームと重ならないだろうか？「洪水」→「死に絶える」を、「赤死病」→「人類滅亡」と読み替えることが可能だからである。今日にあっては、「赤死病」をすでに見た AIDS あるいはエボラ出血熱と読み替えてもよい。

また『赤死病』は、E・A・ポウの短篇「赤死病の仮面」を想起させる。G・N・ブラックマンの

The Scarlet Plague (1912), which not only has a name that reminds one of Poe's short story, "The Masque of the Red Death,"³⁵⁾...

あるいはレイバー教授の

... Jack also borrowed the theme of Poe's story: the idea that no man can escape the terrible realities of disease and death...³⁶⁾

との指摘通りだが、ポウの作品の場合はストーリーもきわめて短く、プロスペロ公爵の大伽藍内での仮装舞踏会という限られた特殊な舞台設定であり、その幕切れも非現実的であると言っている。そしてそのポウにしても、『デカメロン』に描かれた黒死病に少なからず負っている。たとえば、

そこでそうした人々は自分たちの仲間をつくって、他の全部の者から離れて暮らしておりました。そして

病人が1人もいない、よそよりも暮らしよいような家に集まって、そこにとじこもったまま、非常に消化のよい御馳走と極上のぶどう酒をごく適度に用い、暴飲暴食や、その他の行き過ぎはつつしみ、だれとも話をせず、外部の、死の、あるいは病人のたよりはは一切聞こうとはしないで、音楽や、できるかぎりの楽しみをしてそこに住んでおりました。それとは反対の意見にひかれていた他の人たちは、思いきり飲んだり、たのしんだり、出歩いて歌を歌ったり、遊びまわったり、なんでもできるだけその欲望を満足させて、何が起ころうと笑って気にもとめないといったやり方が、こうした疫病には効験あらたかだときめこんでおりました。で、そう口にしていたとおりにできるかぎりそれを実行に移して、昼夜を問わず、あっちの酒場こっちの酒場と渡り歩いて、はめをはずして際限もなく飲みあおり、その上やりたい、気にいったことがあると、それを他人の家でするのでした。³⁷⁾

などは、赤死病が猛威をふるうなか大伽藍内で贅の限りを尽くした仮裂舞踏会が繰り広げられる光景と類似している。無論、構成の点でも物語の展開の仕方の点でも、「赤死病の仮面」と『赤死病』はそれぞれ独自のものを持っているが、共にタイトルおよび『デカメロン』に描かれた黒死病を素材として巧みに利用した点では共通している。ヨーロッパを席捲し、前代未聞の大疫病となった黒死病が、ポッカッチョによって『デカメロン』で克明に語り伝えられ、それがまたボウによって別の独特の形で創作され、さらにはロンドンも黒死病（をはじめその他の疫病）の再来に対する危惧をこのような形で表明したことで、黒死病はつねに大疫病の恐怖や不安、あるいは創作の対象たりつづけ、今日まで尾を引く格好になっている。そして、その根づきには、本章の冒頭で取りあげたノアの箱舟のイメージが、人類共通の大きな不安ないしは怯えのようなものとして息づいているのではないだろうか。

ところで、「言葉や文字が論理化され、それらが個人によって認知され、記憶され、蓄積されて客観化され、特定の個人から他の個人へと伝達され、客観的な知の体系へと発展し、生活が物心ともに豊かになり快適であること」³⁸⁾〈傍点筆者〉が文明であるとすれば、今日の混迷する世界情勢をどう受けとめればいいのか？ 包括的に捉えれば、われわれはまさに何が起こってもおかしくない状況下に置かれていると言える。とりわけ「戦後50年、日本列島は災害に無防備な肥満都市国家へと、ひたすら膨張してきた」そんな日本で、1995年1月17日早朝に阪神淡路大震災(M7.2)が起きた。「高速道路は関東大震災級の地震でも落ちない」「超高層ビルは免震構造だから絶対倒れない」と、関係機関の専門家は胸を張ってきたはずであった。だが、人間がその英知をふり絞って築きあげたはずの文明社会も、瞬時にして崩壊してしまった。6,432名もの犠牲者とともに。まさに、大自然の底力がわずか数十秒のうちに誇示されたとしか思えないほど強大で計り知れないものであることを再認識させた。その時からまだ4年半しか経過していないのに、1999年8月から9月にかけてのひと月ほどのあいだに、今度はトルコ、ギリシャ、そして台湾と、立て続けに世界各地で大地震(いずれもM7以上)が発生、同じく大きな被害をもたらした。

阪神の岩屋駅を見た時、古代の遺跡を見ているようで、使っていた駅とは信じられなかった。昔の引込み線のあとかなと言いながら先に進んだら岩屋駅の看板があってショックだった。⁴⁰⁾〈傍点筆者〉

これなど、Ⅲ章の初めに引用した『赤死病』の冒頭の一部とイメージが重なる。『赤死病』の場合は60年後の、この神戸大地震の場合は地震発生3日後の、それぞれに違いはあれ、共に現代文明の脆さが浮き彫りにされている。ロンドンの場合は、終末観の素材に大疫病を選んだわけだが、

彼の文明観は作品のあちこちにしっかりと披瀝されている。目ざとい少年たちの行動を通じて、鈍化してしまった現代文明人の五感を暗に批判している（p.5）し、

この惑星上の全人類の苦勞は、まったくあわみたくないものだったのさ。使える動物を飼い慣らし、敵対する動物を滅ぼし、土地から野生の草木を切りはらった。それから死に絶え、また原始生活がどっと蘇って、人が作ったものを一掃してしまった——雑草と森林が人の作った田畑に押し寄せ、肉食獣が家畜の群れを一掃し、今では崖の家の浜にも狼がいる」老人は、そう思うと愕然とした。「400万の人々が戯れたところに、今では野生の狼がうろつきまわり、われわれの野蛮な子孫は、有史以前の武器を持って、牙のある略奪者から身を守っている。考えてもみろ！ 何もかも、あの赤死病が発生したばかりに——」（p.24）

は、老人の口を通して、人間の作るもの・育てるものの儚さを鋭く指摘している。そして、

…人類というのは、どんどん元の原始的な状態にもどって行って、やがてまた、文明に向かって血まみれの坂を登ってゆく運命を定められているのだ。数が増えて、空いた場所の不足を感じると、互いに殺し合いを始めるわけだ。（p.29）〈傍点筆者〉

や

人間は数が増えると、戦うようになる。火薬によって何百万もの人間が殺せ、この方法によってのみ、つまり火と血によって、いつか遠い将来に、新しい文明ができてゆくんだ。それで、どんな得になるというのだろうか？ ちょうど古い文明が姿を消したように、新しい文明も姿を消すだろう。築きあげるのに5万年かかるかも知れないが、それだって姿を消すんだ。あらゆるものが姿を消す。残るものとはといえば、宇宙の力と物質だけであり、それらはたえず流転し、作用と反作用とをくり返し、永遠の類型——聖職者、兵士、そして王を生みだしてゆく。赤ん坊の口からは、あらゆる時代の知恵が出てくる。ある者は戦い、ある者は支配し、ある者は祈る。そしてあとの者はみな、あくせくと働き、ひどく苦しむ一方で、その血を流す死体を犠牲にして何度も、果てしなく、文明国家の驚くべき美とすばらしい驚異とが築かれるというわけだ。（pp.131-2）〈傍点筆者〉

ともなると、ロンドンの文明観の集大成とでも言うべきものに昇華している。取るに足りない現象や短期的見地を乗り超え、壮大な文明観・地球観・宇宙観の域にまで到達していると思われる。見方を変えれば、現人類は、文明社会を未来永劫に見て、そこに進歩の言葉を当ててきたわけだが、ロンドンはそのような楽観的進歩史観を鋭く批判しているのである。

地球規模でいつ何が起こっても不思議ではない文明の脆さ・あっけなさを、大きな視座で捉えてみせたことの意義と関連して、高度に発達した交通・輸送機関であればあるほど疫病をまさに加速度的に拡散させる点を、自動車の普及期や飛行機の黎明期に居合わせたロンドンが察知していたことも見逃せない。たしかに、文明が様々な利便性の向上をもたらしたことは事実だが、同時にその進歩の陰で様々な害悪をもたらしもした。『赤死病』では、自家用車や気球（p.64）あるいは飛行船（p.66）で脱出し、赤死病を拡散させたわけだが、それが今日ともなれば、すでに見たような大型の旅客機が地球の上空を所狭しと猛スピードで飛び交う時代である。まさしく人々の移動こそが、疫病の伝播や蔓延に拍車をかけることになる。最近のアメリカ映画「アウトブレイク」（ウォルフガング・ペーターゼン監督、ダスティン・ホフマン主演、1995年）でも、『赤死病』さながらの大パニック状態が活写されている。（この中ではまた、1918年のスペイン風邪の大流行にも言及されていて、9ヵ月間世界中で猛威をふるい、2,500万人もが死亡した事実が語られている。）アメ

リカのアクション娯楽映画だけに、最後は人間の力を信じ、血清が作られ、世界は救われることになるのだが、ここでもアフリカから密輸された猿に端を発した、人々の移動が重要なポイントの1つになっている。

最後に、ロンドンが伝えたかったもう1つのメッセージは、文明の再生サイクルにかかわるものである。迷信や火薬をめぐる老人と子供たちのあいだのやり取り——子供たちが早くも、再生人類の危うい未来を先取り——(pp. 129-130)に続く「火薬」(上に引用)は、今日でいえば核物質⇒原子力発電所あるいは核戦争とも読み替えられよう。そして、文明は5万年周期で栄枯盛衰を繰り返す、と作者は見ている。ブラックマンも言う“the cyclic nature of the universe”⁴¹⁾であり、仏教の輪廻転生すら思わせる件である。

全体的には悲観的な暗い調子が支配的な『赤死病』だが、そのエンディング——エドウィンが20頭ほどの野生馬の群れを眺め、海ではアシカたちが太古の歌を歌っている——は、E・レイバーが“*This final vivid montage is as fine as anything London ever created.*”⁴²⁾と述べているように、不思議に生彩を放っており、気の遠くなるようなサイクルのなかに再生をにおわし、多少の救いをもほめかしている。

V

地球温暖化の影響か、南極の氷山がかつてない規模で崩落を始めているという。前章の冒頭で見たノアの箱舟の洪水を連想させる一件である。向かうところ敵なしだったはずの現代文明の驕りが、今ここにきて、その報いを受けつつある。地球に対して勝手気ままに横暴の限りを尽くしてきたことへの陥穽ないしはしっぺ返しが、上記の崩落であり、さらには世界各地で起きている大地震や異常気象等々の惨害なのだろう。文明などうすっぺらいベニヤ板にすぎないものなのだから、自覚があれば、落とし穴ももっと浅く小さなもので食い止められたかも知れない。その意味でJ・ロンドンの『赤死病』は、人類がなしてきたそうした諸悪を、赤死病という大疫病に見立てて、現代文明に終焉の予言と警告を与えた作品である。ある専門家は、「将来きわめて危険な感染症が「起こらない」とはいえない」としながら、

将来いかに「新しい」感染症が発生したところで、これまで人類史上で知られてきたこと以上の大事件が起こるとは、SF作家には申し訳ないが、私は考えていない。⁴³⁾

と述べてはいるが、『赤死病』に即して言えば、現実には赤死病が発生するかしないかの問題よりもむしろすでに見たロンドンの文明観に示された様々な姿勢のほうがより重要であろう。彼は、つねに文明と大自然の接点に立ち、時に文明から大自然を見、ある時は大自然から文明を見とるようにクロスさせていた。その奥行き之深さと幅の広さが、この作品にも生きているということである。つまり、文明の息の根を止めた時点で何が始まるのかという壮大なパースペクティブに立って、現代機械文明、およびその利便性のみを追求してきたわれわれ近・現代人を突き放してみせたことの意義には、計り知れないものがある。

(1999. 11.)

注

- 1) Loren Eiseley, "Jack London, Evolutionist" (*Before Adam*, 1962), p. 147.
- 2) これについては、拙稿「J. London, *Before Adam*——人類の曙の時代の物語——」（『立命館経済学』第47巻第2・3・4号, 1998）, pp. 319-349参照。
- 3) Jack London, *The Scarlet Plague* (New York: The Macmillan Company, 1915), p. 46. 邦訳は、拙訳書『赤死病』（新樹社, 1995）, p. 33. 以下、本書からの引用は、引用文のあとにページ数をもって示すこととする。
- 4) 拙訳書『ジャック・ロンドン大予言』（晶文社, 1983）参照。
- 5) *The Fiction of Jack London: A Chronological Bibliography*, compiled and annotated by Dale L. Walker (Texas Western Press, 1972), p. 27.
- 6) *The Letters of Jack London*, Vol. Two, edited by Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard (Stanford University Press, 1988), p. 882.
- 7) *London Magazine*, Vol. 28 (June, 1912), pp. 513-540.
- 8) Russ Kingman, *Jack London: A Definitive Chronology* (California: David Rejl, 1992), p. 147.
- 9) *The Letters of Jack London*, Vol. Three, p. 1396. なお次ページには、“The *American Sunday Monthly Magazine* was a supplementary feature syndicated in Hearst newspapers.”との注が⁹付いている。
- 10) Russ Kingman, *op. cit.*, p. 129.
- 11) *Ibid.*, p. 153.
- 12) Francis Lacassin, “Jack London Between the Challenge of the Supernatural and the Last Judgement” (*Jack London Newsletter*, Vol. 8, No. 2, 1975), p. 62.
- 13) *The Letters of Jack London*, Vol. Three, p. 1396.
- 14) *Ibid.*, p. 1396.
- 15) *Letters from Jack London*, edited by King Hendricks and Irving Shepard (New York: Odyssey Press, 1965), p. 476.
- 16) Jack London, *John Barleycorn* (Santa Cruz: Western Tanager Press, 1981), p. 119. 邦訳は、拙訳書『ジョン・バーリコーン』（社会思想社・現代教養文庫, 1986）, pp. 100-101.
- 17) 『国民百科事典』3（〔1961〕, 平凡社, 1969）, p. 137.
- 18) ボッカッチョ作・柏熊達生訳『デカメロン(上)』（〔1987〕筑摩書房, 1997）以下、各引用箇所¹⁰のあとに同書のページ数を示した。
- 19) 『国民百科事典』3, p. 137.
- 20) 酒井シヅ編『疫病の時代』（大修館書店, 1999）, v.
- 21) 同上, p. 70.
- 22) 同上, p. 71.
- 23) 京都新聞, 1997年4月11日, p. 3. これによれば、「インフルエンザのような症状で始まり、重症化すると全身出血などで死亡。治療はない」という。さらに、16年ぶりに1995年に今度は同じアフリカのザイールに現われた。同新聞（1995年5月15日, p. 5）は、「発病後わずか数日で全身から血を流して死亡するウイルス感染症」「死亡率は90%」「最初の患者が総合病院にかつぎ込まれ全身から出血して死亡して以来、感染が広がった」さらには「地球上のどこにでも1, 2日もあれば行くことができるほど交通網が発達した現代。感染源も分からずどこで流行するか知れない致命的な病が広がるのは防げるのか。英マンチェスター大のピックストーン教授（医学史）は「伝染病に有効だと考えられてきた医療メカニズムは崩壊した」と警告する」と伝えている。
- 24) 京都新聞, 1999年7月21日（夕）, p. 2.

- 25) 須山静夫「ジャック・ロンドンの悲劇」(明治大学文芸研究会『文芸研究』第2号, 1955), pp. 54-5.
- 26) 『国民百科事典』3, p. 539. このなかから, 取りあげるもののみ, 141%拡大して掲げる。
- 27) 同上6, p. 286. 草分けの時代で, ロンドンの時代と直接関係のあるところでは, 「⑤米国ライト兄弟の歴史的成功の飛行機。1903年12HPのガソリン機関をつけ人は伏せて乗りプロペラは左右2基の後部推進式。時速48 km。⑥フランス, アンリ・ファルマンの尾部が箱舳(たこ)式のボアザン複葉機。1 km以上飛んだ欧州はじめての飛行機で, 世界ではじめて空中旋回し離陸地点に帰ることができた(1907)。⑦1909年イギリス海峡38 kmの横断飛行(37分)で有名なフランス人ルイ・ブレリオの飛行機。25HPガソリン機関で最大時速75 km。」とある。また, 「(19)13年9月に, フランスのデュベルデュッサン単葉機(140HP)によって初の時速200 kmが記録され」(p. 294)たという。
- 28) 『翼の王国』第362号(全日空, August 1999)の国内線用および国際線用による。
- 29) 『国際連合 世界人口予測: 1950~2050年 第1分冊』(原書房, 1996), p. 109. 以下, 2つの数字も同書による。
- 30) 河野稠果監訳『WORLD BANK 世界人口長期推計 '94/95 (1990~2150年)』(東洋書林, 1996), p. 4.
- 31) Joan London, *Jack London and His Times* (Seattle & London: University of Washington Press, 1968), pp. 307-8.
- 32) Russ Kingman, *A Pictorial Life of Jack London* (New York: Crown Publishers, 1979), p. 165. 邦訳は, 拙訳書『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』(本の友社, 1989), pp. 300-301.
- 33) 筆者は, この「アリア族」のことが気になったので, 知人であるウイスコンシン大学の Susan Nuernberg に問うてみたところ, 以下の回答を得た。
- 11 October 1999
Dear Eiji,
.....
- I think London is saying that Hare-Lip's descendants will eventually spread out in search of more space, room or territory, like Western Europeans did. Only difference is Hare-Lip's descendants will go East, while the "Aryan" migration was always to the West. The concept London refers to here is "manifest destiny" — basically the idea that the Sun shall never set on the British empire. But it also does suggest the conquering of everyone encountered in the path and their inability to resist being conquered. I would say London is NOT using it in a racist manner because Lopez (pino) is "very black." London is describing how the "pressure of population" tends to lead to migration to new areas over time.
- だが, これで筆者の疑問が払拭されたわけではない。
- 34) 『旧約聖書』(日本聖書協会, 1983), pp. 7-8.
- 35) Gordon N. Blackman, Jr., "Jack London: Visionary Realist Part II" (*Jack London Newsletter*, Vol. 14, No. 1, 1981), p. 6.
- 36) Earle Labor, *Jack London* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1974), p. 109.
- 37) ポッカッチョ, 上掲書, pp. 22-3.
- 38) 岸根卓郎著『文明論』([1990], 東洋経済新報社, 1993), p. 2.
- 39) いずれも柳田邦男「欺かれた現代都市」(京都新聞, 1995年1月20日), p. 15.
- 40) 津村喬『神戸 難民日誌』(岩波書店「岩波ブックレット」No. 372, 1995), p. 29.
- 41) Gordon N. Blackman, Jr., *op. cit.*, p. 7.
- 42) Earle Labor, *op. cit.*, p. 112.
- 43) 酒井シヅ編, 上掲書, p. 226, p. 231.

付記：本稿の初校ゲラが出る前に、山川鴻三著『楽園の文学——エデンを夢見た作家たち——』（世界思想社、1995年）に目を通す機会があった。その中でD・H・ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』（1928）が取りあげられ、氏は次のような一節でその章を結ばれているので、参考までに引用しておきたい。

大異変が起こり、いったん人類は絶滅して、地球はふたたび下等動物から出発しなければならないというのだ。このようなことも、今日のわれわれなら考えられぬことではない。しかし、今から半世紀以上も前に、すでにこの事態を予見して、このような言葉を放ったロレンスは、まことに偉大であるといわねばならない。優れた文学者の触覚は、これほどまでも鋭いであろうか。（p.149）

【赤死病】の執筆は、『チャタレー夫人の恋人』よりも18年前のことであった。